



銀鏡ペイントってナンダ？

めっきの下地作りにパテが使える!? “ミラーコーティング”によって グサグサだっためっきパーツも容易に蘇る。

市場では数々の高機能ペイントが開発されているが、どうしても実現しなかったのがめっきの質感。そのハードルをクリアして登場したミラーコーティングは、塗装ながらメッキの光沢・質感に肉薄した新しいペイントだ。ポリパテの上からも塗装できるので、サビだらけのめっきフェンダーの下地作りもきっと楽になる。

取材協力 / オールフィックス Phone087-875-1244

四国唯一のミラーコーティング代理店、オールフィックスで製作してもらったサンプル。ペイントなので半分だけマスキングして塗ってもらったが、光沢部分はまさにクロームめっきの質感だ。下の写真を見ると、塗装の厚みも分かる。トップコートに塗料を混ぜることで、カスタム感が強いカラーめっきもできる。





サビがでてしまったハンドルバーを、半分だけミラーコーティングで仕上げた。処理した左半分は、まさに再めっきと同様の光沢と質感で、これなら凸凹のひどいパーツを無理にバフ研磨しなくても、パテで修正してミラーコーティングでもいいかな、と思える(素材が厚いハンドルバーはバフ研磨でも良いだろう)。

上ノアルミ製トップブリッジにペイントした例。金属パーツらしい重量感が出ている一方、膜厚感のある感じがめっきとは若干異なった印象だ。下ノフロントフェンダーとサイドカバーはいずれもABSでトップコートに着色してカラーめっき仕上げとなっている。キャンディペイントとは違う金属感のアル輝きが特徴的だ。オールフィックスではガソリンタンク3万8000円～、エンジンカバーパーツ8000円～、小物パーツ3000円～という値段でミラーコーティングを行っている。

The METAL WORKS

レストア好きのサンメカにとって、再めっきは常に身近な作業のひとつである。ユニクロ、クロームめっきを問わず、輝きが失われたパーツが再び輝くのは、レストアラーにとって大きな喜びだ。しかし美しい仕上がりを得たいなら、下地作りが重要であることは、多くのサンメカの知るところ。

めっきの事情をあまり知らないサンメカに一応説明しておく、めっきの膜厚はミクロン単位であり、また電気伝導性のある素材にしか着かないので、分厚くプライマーサフェーサーを吹いて平滑に研ぐというワザは使えない。したがって、バフ研磨によって金属素材そのものを平滑に研ぎ上げてはならないのだ。ここで「少々凹凸はめっきの厚みで埋まるだろう」と手をはなれば、仕上がりにも確実に現れてしまう。

だが、バフによる下地作りにも限界はある。素材の肉厚が厚いホイールリムはまだしも、フェンダーやチェーンケースなどの薄物パーツは、サビ除去のために研磨を行うと熱で変形したり、さらに状態が悪いパーツは部分的に欠落してしまうこともある。こうした場合、鍍金ハンダによって素材を盛り上げ、再度研磨して表面を整えるテクニックがある。しかし現実問題として、そこまで手間をかければコストもそれなりに掛かるし、そもそも、そんな面倒な仕事をしてくれる職人さんも、そう多くはない。だから素材としてもっと程度の良いパーツを探したり、パテ補修の後にペイントで仕上げるのが善後策とされている。

こうした現状に対して、先取り派のサンメカが注目する興味深い技術が登場した。それがミラーコーティング(銀鏡塗装)である。実はこのページのパーツはすべてミラーコーティングで仕上げたものだが、写真で見ればクロームメッキと区別がつかないほどの仕上がりが。しかしながら実態は塗装なので、金属パーツだけでなくABSやPPなどの樹脂にも施工でき、当然ながらパテで補修した金属パーツに対しても使用できる。

ミラーコーティングの仕組みは、鏡を作る工程とほぼ同じで、科学反応によって素材の表面に銀膜を張り付け、これを特殊クリアで押さえている。こうした技法は従来からあったが、銀膜の黄変や剥がれが少なくなったことで、自動車やバイクメーカー、家電や遊戯具メーカーでも採用が始まっているという。



スクーターのシンダーヘッドカバーに施工した例。これを見るとミラーコーティングの表面が僅かに黄色がかったりすることがわかる。さらに技術が進歩すれば、もっと透明度の高い仕上がりになるはずだ。

レストアラーにとっては、パテで補修したパーツがめっき調に仕上がる点が、注目に値することは間違いない。厳しい目で見れば、塗装ならではの塗膜の厚み感や、若干色が乗っている(僅かな黄色だ)のだが、素材のコンディションを選ばず鏡面仕上げを得られるのは画期的。前後フェンダーだけでなく、錆びてしまっためっき仕上げのガソリンタンク、それもへこんでしまったものでも、通常のタンクと同じ手順で補修した後、最後にミラーコーティングを行えば、諦めざるを得なかったタンクが数多く復活するはず。サンメカの鍍金作業を強力にバックアップする技術となるはずだ。